

後拾遺和歌集極目錄



後拾遺和歌集

全部 二冊

飛鳥井雅網卿

墨痕不涉疑惑

者也

寶永三年
香冬上旬

集
可林

外題冷泉殿為初卿筆

後拾遺和歌集 上

544
コ
100





阿久野の事
多岐の事
たつらふの事
元祐源順紀時文治と望城ホ、後あり
小舟の事
ひるの事
しるの事
とく
おの事

しるの事
おの事
とく
ひるの事
小舟の事
たつらふの事
多岐の事
阿久野の事
万葉集の事

後拾遺和歌抄卷第一

春上

正月一日一人侍多の

小大君

いふ程の心付物おのよそおとよそとよそとよそと
ふらの園いづれも侍多のりひり侍多の

光朝法師母

わくふよい海霞いふあいな春かおわくふとけけ
春はいしうーいあきいふとくもあきと
ゆきな 源師賢物

あかきとよそとよそとよそとよそとよそとよそと

春いひり一人侍多の

橋後總物

あしけの園いづれも侍多のりひり侍多の

寛和二年花山院の哥合か一人侍

大中臣能宣物

春の心付物おのよそおとよそとよそとよそと

いふ程の心付物おのよそおとよそとよそとよそと

人の心付物おのよそおとよそとよそとよそと

いふ程の心付物おのよそおとよそとよそとよそと

小寺小正月書の書りつとていふ

平兼盛

書後てつらも海よりまにいらぬ書の日を
題しす 加賀左衛門

あつたまからぬしゆも海より年あつたあつた
天曆三年大政大長乃七十賀しゆ
屏風書りし 大中長能宣朝臣

たのむと澤入の書りしけきさのあつた
一條院の時殿上人書の方とていふ
まれのまらぬ 紫式部

今う野書の方とていふあつたあつたあつた

花山院の哥合の霞とていふ侍る

藤原長能

谷の氷の書りしあつたあつたあつた

たのむと

藤原高経朝臣

まのふ野の書りしあつたあつたあつた

和泉式部

昔の書りしあつたあつたあつたあつた

鷹司友房七十賀れ月次の屏風

臨時客の書りしあつたあつたあつた

赤染巻門

雲の袖に浮く様もまじく侍の春の心もさす
春隠時客とよらね

小弁

心まじく侍の春の心もさす
入道前太政大臣大卿食一侍多る一屏風
小隠時客とよらね

藤原頼尹卿

春の心もさす侍の春の心もさす
ねの一屏風大卿食の心もさす

一人侍多る 入道前太政大臣

春の心もさす侍の春の心もさす
氏への春隠時侍多る侍三升
とて可合一侍多る侍多る
一人侍多る

春きて侍多る侍多るの春の心もさす
鶯と一人侍多る

大中臣能宣卿

春きて侍多る侍多るの春の心もさす
正月二日ある侍多る侍多るの春の心もさす

一人侍多し 源兼隆

静のり命あつたははるくよきものいふは
選子内親王のいとまはるくよきものいふは
と達りあつたははるくよきものいふは
いとひてあつたははるくよきものいふは
と一人侍多し 一人侍多し

清原元輔
加賀の多し侍多し 清原元輔
一人侍多し

後總持の家の家として春の里に
藤原範光の家の家として春の里に
一人侍多し

小野文子と政大の家の家として春の里に
一人侍多し 清原元輔

いとせし宿のまはるくよきものいふは
一人侍多し 和泉守

いとせし宿のまはるくよきものいふは
正月の庭にわけておまつたははるくよきものいふは
一人侍多し 一人侍多し

昔の御中より御事なりと申すに
正月十日日よりの御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに

御事成助

今と六條の御事なりと申すに
今と六條の御事なりと申すに
今と六條の御事なりと申すに
今と六條の御事なりと申すに
今と六條の御事なりと申すに
今と六條の御事なりと申すに
今と六條の御事なりと申すに
今と六條の御事なりと申すに

右大臣の方

三系院沖時お上達部殿と申すに
三系院沖時お上達部殿と申すに
三系院沖時お上達部殿と申すに
三系院沖時お上達部殿と申すに
三系院沖時お上達部殿と申すに
三系院沖時お上達部殿と申すに
三系院沖時お上達部殿と申すに
三系院沖時お上達部殿と申すに

堀川右大臣

御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに

氏子の御事

御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに
御事なりと申すに

左中將の御事

高き山にありてはまの松のちとて松のたけのたけ
正月七日の卯日ふらりてて雪降ゆまふ

よちよ

伊勢大輔

人ふま野の松とてはまの松のたけのたけ
正月七日の卯日ふらりてて雪降ゆまふ卯
杖つまておまの道宗のたけのたけ
とてせてゆまれのたけ

類一らと

大中臣能宣のたけ

卯杖にたけのたけのたけのたけのたけ
とて雪のたけのたけのたけのたけのたけ

和泉武部

かきつ節の雪のたけのたけのたけのたけ
後冷泉院の時宗のたけのたけのたけ
とて

中原頼成のたけ

はまの松のたけのたけのたけのたけ
正月七日の周防内侍のたけのたけのたけ

藤三位

敷つとてはまの松のたけのたけのたけ
長樂寺とてはまの松のたけのたけのたけ

大江正言

屏風の繪ふらばははくもまゝて接人の
眺めよと云ふは 藤原長能

ありふらむと云ふは 世の物にふらむと云ふ
たゞと云ふは 和泉式部

秋の命もよと云ふの跡は梅のつとて焼く
後冷泉院の四時后文の哥合は残雪
と云ふは 藤原範成

花のつとて梅のつとては 江の蓋は若葉にふらむ
屏風の繪は梅の花の家にたるとまゝに
ありと云ふは 平兼盛

梅のつとては 梅の花のつとては
ありありの哥合は梅と云ふは
大中臣能宣朝臣

梅の花のつとては 梅の花のつとては
昔の歌のつとては 梅の花のつとては
と云ふは 菅原能言公任

と云ふは 梅の花のつとては 梅の花のつとては
たゞと云ふは 大江素言

梅のつとては 梅の花のつとては 梅の花のつとては
村と四時沖前の紅梅と女蔵人といふ梅を

家の紅梅とうほろり包られて花のうらやま
あひまきうらしてはねりゆく年が枝よむと
をいもゆきか 弁乳母

かろりあひまきうら梅の花のあなむと思ふ
影あつと 大江赤言

我宿ふらあつと梅の花のあなむと思ふ

法基法師

風あけいづら梅の花をきかると梅の花を
道雅三位の八条の家は隣りあふの家
梅の木はあつとあつとあつとあつとあつと

取とあつと 藤原経衡

あつとあつとあつと梅の花のあなむと思ふ
水邊梅花のあつとあつと

平経章朝臣

あつとあつとあつと梅の花のあなむと思ふ
長樂寺ふらあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつと 上東門院中将

あつとあつとあつと梅の花のあなむと思ふ
あつとあつとあつと 小辨

あつとあつとあつと梅の花のあなむと思ふ

帰房とよみ 赤深門

ぬきりきりしるの成りなり又ふとけしと成と思ふ

藤原道信朝臣

ひらく後中平ぬる鷹今ふいその昔成をいふらん

馬内侍

うぬぬきりしるぬきり花のこらと人かたふか

津守國基

うぬぬきりしるぬきり花のこらと人かたふか

弁乳母

わらわぬきりしるぬきり花のこらと人かたふか

屏風女二月山田うらぬ帰鷹をいふらん

とよみ 大中臣能宣朝臣

鷹の羽さしるぬきりしるぬきり花のこらと人かたふか

天徳二年内裏平合小柳とよみ

坂上公城

あつと年とけしと善柳のいふらん善柳のいふらん

柳池の水とよみぬきりしるぬきり花のこらと人かたふか

藤原経衡

池の武とよみしるぬきりしるぬきり花のこらと人かたふか

類とよみ 藤原元生

あさ緑をたてまひるま柳の交中昔の月を
三月よりよ良暹法師の許おちりわと
はまてゆきかしくして花より平しくあ
とまてつねいつさる物とてなむとて
けりりるる 藤原孝善

春霞つらつらあまて思ひきくし
くはるよ海りるる成かくやといは
りるれいつさるるる

藤原隆經の作

し梅より成つるまの心やそあまの

まゆりつらつら花より後總の伏
見の葉よりまきりるる花た
あまてつらつら侍るる

白后文美の作

うら海より身さるれ梓より
花より海りるるよさる歸り
あまてつらつら 賀茂成助

小春く秋とあはれ思ひて
題不知 水原法師

梅花よりらるる思ひて

中原新時

梅のよさうな枝葉をかきして柳の枝葉をせしむ

橘元任

明の書をゆいしむさうな枝葉をたすかみはれ

一條院沖時殿とのうらな花のまきも

女のもよひのうらな

源雅通朝臣

行のゆかやていふうらな揚のまきもさうな枝葉をたす

中 城少将

おきてたかひのうらな揚のまきもさうな枝葉をたす

後冷泉院四時うらのよきうらな花のまきも

てきまのうらなて高倉れ一交のまきも

うらて侍まのまき一交後河

思はゆかひのうらな花のまきもさうな枝葉をたす

今上沖時殿とのうらな花のまきも

まのうらな中交のまきもさうな枝葉をたす

まのうらな右大臣のうら

うらなゆかひのうらな花のまきもさうな枝葉をたす

後子の繪の花のまきもさうな枝葉をたす

まのうらな 源憲澄

今もいと美し人のたのむる花のうらむとてさきん
題不知 系主輔親

伊予まことらふとてわらふし梅はうらむねばりまされし

菅原為言

いと梅のふききりあはるは花のふききりあはる

遠花といらぬといふは花といふは花

小弁

山梅はうらむし小島島をくわらむとては花のうらむ

長樂寺より伝ふるは母院のしるしの梅を

伊予のやまをくわらむとては花のうらむ

と東門院中将

小島島をくわらむとては花のうらむ

白河院より伝ふるは母院のしるしの梅を

臣部は長家

東海の人をくわらむとては花のうらむ

南殿のうらむとては花のうらむ

高岳頼言

今もいと美し人のたのむる花のうらむ

うらのよめいさかきとては花のうらむ

花のうらむとては花のうらむ

太宰大貳實政

春と行む心や成らぬ
春と行む心や成らぬ

大中臣能宣卿

梅花のあはれふらふこのまはるけ
河原院とてふはあはれとてふ

平基盛

今も成りては公孫と梅花のあはれ

夜思梅のあはれ

能因法師

梅のあはれはあはれありを夢少く物

こころとをなしてあはれ

よみ

よみ

梅のあはれはあはれありを夢少く物

遠くあはれとてふ

よみ侍

和泉守

都人のあはれとてふ

題

今も成りては公孫と梅花のあはれ
我があはれとてふ

道命法師

花より人かよひよりのそとそと春のまをさしひるは

世武部

草とよふ秋の海 桜花をさるるのふり場は
そけのき事侍をゆは花とよそよ

藤原公経朝臣

花をて地身おとまをさるる春の浪のあつ海は
堀川右大臣の九條の家として毎山暮は
やうふやけし人侍をゆ

前中納言朝基

我宿の事よとて今がこまをさるる春のまをさる
類しらす 藤原元美

思ひく歩をさるる桜花よは福笑のあつ海は

弟唐二年一月裏尋合てりしは

右大臣通俊

まはらけの桜をさるるのふり場は
屏風は接人の花をさるる

平基盛

花をて家落よまをさるるのふり場は
屏風の繪は三月花宴をさるる

きんめいりょうりょう

しんせいのひびきのまきれたいさくさつと
はる泉院春文とりくろ時高とのれ
こゝたふよとて雲井院おまうれとるは
ていりうりくた 良暹法師
うらまはまな今はしきよのたやたごらん
通宗の片能登守として侍る時國
哥合一ゆきねりよあふ

源縁法師

山櫻あしきいのみゆりやまれのりや成らむ

宇治前太政大臣花ふまきとまてしつ

ふれ

氏への母信

仔細くつたふくかきと考るきつとまき
はくしひり年されありくゆきし
ひゆきとて三月ららふ白川一海り
くらけきとてお模りもくわらりあり
とつひとせとてゆきれりよあふ

中納言定頼

こころ花風よされあつものじくはか
遠花誰家そとつふと

坂上定成

おもしろき梅の匂は我が宿の夜をくぐり
年々とお花とくちとくちとくちとくち

源縁法師

春よよきとくちとくちとくちとくち
高陽院の花よりよきとくちとくち
くちとくちとくちとくちとくちとくち
くちとくちとくちとくちとくちとくち
くちとくちとくちとくちとくちとくち
くちとくちとくちとくちとくちとくち

てしうてゆき候 能因法師

おもしろき梅の花よりよきとくちとくち
くちとくちとくちとくちとくちとくち
くちとくちとくちとくちとくちとくち
くちとくちとくちとくちとくちとくち
くちとくちとくちとくちとくちとくち
くちとくちとくちとくちとくちとくち

おもしろき梅の花よりよきとくちとくち
高倉のつまの女房花よりよきとくちとくち
くちとくちとくちとくちとくちとくち

何事と昔のさうなほまういふるに川原をみせ
内におはまうりある家とて人いさけら
たうて争いしうゆふふと橋とのそとさ
やとよれ 大江匡房の片
たさこのおれへの後あまわこ山のすまはんとあ
遠山橋といふやふとよれ

藤原清家

うー野におつらう華の事かかほほていふ花橋は
周防のまうりさうしうしうさうふ家の花
と行いむくくしうゆふとよれ

藤原通宗の片

思ふ事あつし海邊橋らりてのほれあてあ
花下におく人と成まうるといふとよれ
良選法師

ふ人も病あつし山橋らりてうらまは
春長中納言東山小菟のゆふとよれの夜
あつらふ法師あてされまうとよれ
ゆふとよれ 加賀守の門

比るまての振舞とまじふ此切しうらまのまは
東三條院の四房風と振人の心ばさうと

今方何と云ふ所 源道深

あつたはつたふらふらとていふ所
おのの屏風のふらふらとていふ所
あつたはつたふらふらとていふ所

我宿よとていふ所
大細言とていふ所
はまはつたふらふらとていふ所

中務卿共平親王

あつたはつたふらふらとていふ所
あつたはつたふらふらとていふ所

後拾遺和歌抄卷第二

春下

三月三日枕花と西流りて

花山院御製

今よりてありき物とてとていふことごとくいふこと

天曆の時の屏風は枕の花もさる可と

つら 法原元輔

あはれなる世とてかき枕の花もさる可と

世も寺のいと世とていふことごとくいふこと

出羽辨

あはれなる世とていふことごとくいふこと

永承五年六月祐子内親王家尋合

侍りふことの中は題とていふこと

堀川右大臣

梅の花のあはれなる世とていふこと

題とていふこと 月大臣

行ふこととていふこととていふこと

天徳元年の尋合

平重盛

よきこととていふこととていふこと

大中は能宣物也

梅の花をいさむらひて何よりまはりの花にあらぬ

屏風の繪もさう花のらうとあつらひ

取どし侍多し 源道海

山室よりさぬ花火はまきとあつて今もさる

太神まのやきてゆきふもさるお伊勢の

くあつらひゆきふいに春のかり侍く

かのまゝいさむてさうとわたりゆくらり

まはらさるてさうゆきふ

右大弁通後

よめひそのさる梅の花はつらふらひ

山は落花とさうゆきふ

橋成元

さう花をらふぬきとあつらひさる

隣花とさう 坂と定成

梅らうとありおとさる風は花をらふさる

花の庭より侍多しあつてさう

清原元輔

花の落ぬさるわらふさるさるさる

兼暦二年内裏は後書は合さるさう

侍中

藤原通宗朝臣

行じよらりしとまきして梅花ありぬきもたれありけり

たつ子

永源法師

ふつ物成も思ふころと花の縁らせらるる事なり
三月より小花のちりてくくくくくくくく

清門沖運殿

うらやまうらやまの花のなほ多し物成り身成り世ののこ
永義五年六月廿日祐子内親王家の

奇合一侍多りよらる

大貳三位

望月お入はしむいんく花やしらまらるる事なり

類志

中納言定頼

うらやま花のちりてくくくくくくくく
家のころとせらりて水おあつてくくく

よら

大江赤言

らふよあ人よまきして梅花ありぬきもたれありけり
白河よして花のちりて水おあつてくくく

侍多り

土御門右大臣 所居

しんぎんをたつてくくくくくくくく
栗田右大臣の家へくくくくくくくく

ふらり

藤原為時

ふらりふらり花の影をさし身をかきわたり思ふ
庭よりさしおひらり侍多し

和泉式部

風たゆまらざる庭梅らるる昔のたづねし
三月より野をさし侍多し

藤原義孝

夏もたゆまらざる月夜もさし侍多し
所よりさし侍多し 和泉式部

ふらりふらり花の影をさし身をかきわたり思ふ

藤原義孝

ふらりふらり花の影をさし身をかきわたり思ふ
月輪よりさし侍多し 元祐惠慶あり
ふらりふらり花の影をさし身をかきわたり思ふ
侍多し 大中臣経宣御下

つら子

母文女御

ふらりふらり花の影をさし身をかきわたり思ふ
若くやふらりたる花の池より侍物をさし
源為善朝臣

藤の花をさし侍多し

延暦二年日裏寺合よ菴た花ふとしあり

入納言實事

水原みづのふししをいていくていきつふりたりけはあはれはあるが
氏部うぢべのあまらしきいちふり侍うぢ多しり侍多しり侍三さん升しやう寺でら
としてし寺でら合ごう侍うぢ多しり侍多しり侍花はなとしあり侍多しり侍

侍多り

一人一人

としり侍のいれはりの志しのまめをかつる侍のあらはてし

たり

藤原伊家

からいわせていきつふりたりけはあはれはあるが

大貳高遠

延暦二年日裏殿寺合よ菴た花ふとしあり
より

良遷法師

ふらいわれていきつふり侍のいれはりの志しのまめをかつる侍のあらはてし

類

菴た花ふとしあり

法ほつふとしあり侍のいれはりの志しのまめをかつる侍のあらはてし
法ほつふとしあり侍のいれはりの志しのまめをかつる侍のあらはてし
法ほつふとしあり侍のいれはりの志しのまめをかつる侍のあらはてし

能因法師

我わがいらいだしのいれはりの志しのまめをかつる侍のあらはてし

三月は... 都... 中納言定頼

三月... 中納言定頼

大中長能宣親

三月... 采胤法師

采胤法師

三月... 采胤法師

後拾遺和歌抄卷之三

夏

四月初より 和泉式部

こころまじりてなごめたるてし教をよみけり
四月丁部より

藤原明衡の長

此のまじりてなごめたるてし教をよみけり
栲津園のこころより所より

能因法師

わが宿のまじりたるてし教をよみけり

冷泉院春のまじりける時百首より

源重光

夏まじりたるてし教をよみけり
たゞし

曾孫好忠

わが宿のまじりたるてし教をよみけり
山家水鏡より

大中長福の長

いそぎのまじりたるてし教をよみけり
山家の卯花より

藤原通宗の長

此のてらにありては我の心もなほ
民部之春實に守りて侍るべし
升寺にて年合一侍るべし
とあり

あつ波の若きころとてはつら
題一とあり

月影と多とてはつら
あつ波の若きころとてはつら

大中長能宣
卯花のいけありけり

正子内親王の繪合一侍るふか
遠波とありけり
お摸

又とせ波の若きころとてはつら
伊織大猫

卯花のいけありけり
卯花とありけり

源道海

雲のいけありけり
筑紫大山寺とてはつら
けりあり

元慶法師

我宿の垣ぬまを家部云つきの軍にむかひ
たいまら次 慶範法師

部云れ海そやふ系わし事のたすき
三月の晦日右近のむよふ部云きん
とて海らくゆらりまらよ秋くふまき
ゆゆらきれ 堀川右大臣

部云ぬらりの名はうでまきうすふとや宿のた
道命法師の寺に侍りよけり
藤原尚忠

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あ

道命法師

あ一雲の部云のまのそとるは夢にまを
裸子内親王を茂のいにきとありま
時女房とてゆらると年へて後三條院
の時新院のゆらゆ人のまよ昔は思
ふらの人の日かふらけりて

皇后文美化

まのまの神の部云ありてむくまのまを
ふらのまのてかふらゆらゆら
くまのまのまのゆらると大を

物さるるれいけいりき家

備前内侍

郭よりしてそとへはさしたつてはるる今昔を

日月さるるる海の中よりさるる部

あはれまはるる人さるるいよこせさるる

まは

大中臣能宣朝臣

少きさるるさるるさるる我の心路さるる

伊也へさるる事係るる此の中さるる

部とさるるさるる 増基法師

こははるるのさるる部とさるる部の物さるる

類不知

橋資成

さるる海さるるさるる部とさるるさるる

永徳五年六月の祐子内親と家の事

合ふさるる

伊勢大輔

さるるさるるさるる部とさるるさるる

能因法師

さるるさるるさるる部とさるるさるる

藤原基房朝臣

さるるさるるさるる部とさるるさるる

小辨

祐の初を教はりありし事所をさうりなむこころよ
祐子内親王家の哥合侍守の母
哥合をさうりなむこころよ
侍守の母
宇治前太政大臣
五の月たあまの郭公たこころのいささ
宇治前太政大臣二十種の後合
侍守の母
郭公とあり

赤深者門

あまの初をさうりなむこころよ
しはつりつる物と郭公とあり

相模守としてあり侍守の母
郭公とあり

東海公思ひてあり郭公とあり
郭公とあり

長保五年九月入道前太政大臣家の
哥合は遠少郭公とあり

大江嘉言

侍守の母とあり郭公とあり
六月より赤深の母とあり

道命法師

郭よりついでにまねがひのきまかしてのほは務まきわ
はらひあはれまきむすむすのそおまふのりまふ
おほいそこのほかしゆりして山寺はゆきふ
郭とまてしる 律師長海
一勢しきかひりおほいふゆきまふまふ
郭とまふ 能因法師
郭とまふのりまふまふまふまふ

大貳三位

まふまふまふまふまふまふまふまふまふ



小辨

程てのやんまふまふ郭と物むし宿まきま
早苗とまふ 曾祢好忠

まふまふまふまふまふまふまふまふまふ
永承五年二月まふとの根合まふまふ

藤原隆資

まふまふまふまふまふまふまふまふまふ
宇治前大政大臣家三十種のはま合
侍まふまふ二月雨とまふ

相模

ふまのりひのりまきれうりまのりなむひまのり
又内郷経長、桂の山庄として六月ぬはる

藤原純長卿

六月ぬはる、山庄の事なり、あまのりは、はのり

橋後總卿

はまのりまのりまのりまのり、あまのり、あまのり

野一守

穀貫法師

六月ぬはる、あまのり、あまのり、あまのり

六月ぬはる、あまのり、あまのり、あまのり

まのり

惠慶法師

かたはらて、あまのり、あまのり、あまのり

永承六年、六月廿日、あまのり、あまのり

あまのり

良暹法師

はまのり、あまのり、あまのり、あまのり

右大臣中将、小侍、あまのり、あまのり

あまのり

大中臣輔弘

園の、あまのり、あまのり、あまのり

あまのり、あまのり、あまのり、あまのり

あまのり、あまのり、あまのり、あまのり

伴珠大輔

くらげのあひだにわが宿をくらげのあひだ
花梅とよぶ 相模

くらげのあひだにわが宿をくらげのあひだ
大貳高遠

昔と花梅とよぶのあひだにわが宿をくらげのあひだ
誉とよぶ 源重之

昔と花梅とよぶのあひだにわが宿をくらげのあひだ
宇治兼太政大臣三十種の後方合
侍多るなり 誉とよぶ

藤原良経朝臣

くらげのあひだにわが宿をくらげのあひだ
類とよぶ 能因法師

くらげのあひだにわが宿をくらげのあひだ
くらげのあひだにわが宿をくらげのあひだ
源重之

くらげのあひだにわが宿をくらげのあひだ
誉称好忠

くらげのあひだにわが宿をくらげのあひだ
氷室とよぶ 源重之

くらげのあひだにわが宿をくらげのあひだ
夏の日よとよぶ 源重之

土御門右大臣

夏夕の月がまゝに
大貳資通

何と云ふは思ふに
宇治常太政大臣家

三十條の御方合

氏部心長家

夏の新しき月新の庭に
中納言定頼

道海の家にて
雨夜思惟友と

いさむのつる庭の唐園
いさむのつる雨の

いさむ

能因法師

いさむのつる雨の
いさむのつる雨の

いさむ

曾祿好忠

いさむのつる雨の
いさむのつる雨の

平基盛

いさむのつる雨の
いさむのつる雨の

いさむ

堀川右大臣

いさむのつる雨の
いさむのつる雨の

内大臣

夏月秋の月と云ふに秋と云ふは風を
後總朝臣の許して晚涼如秋と云ふ心と
云ふゆゑなり

源朝總朝臣

夏月秋の月と云ふに秋と云ふは風を
屏風の繪に夏の色と云ふと云ふは山と云ふ
かこもる所と云ふゆゑなり

大中臣總宣朝臣

夏月秋の月と云ふに秋と云ふは風を
泉聲入夜涼と云ふは山と云ふは山と云ふは
泉聲入夜涼と云ふは山と云ふは山と云ふは

源師賢朝臣

夏月秋の月と云ふに秋と云ふは風を
六月後と云ふは

伴瓊大輔

夏月秋の月と云ふに秋と云ふは風を
水と云ふは水と云ふは水と云ふは水と云ふは

後拾遺和歌抄卷第四

秋上

秋の日はゆる 後人不知

うらなふ秋の日はゆる 秋の日はゆる 秋の日はゆる

惠康法師

あふらふ秋の日はゆる 秋の日はゆる 秋の日はゆる

あふらふ秋の日はゆる 秋の日はゆる

藤原為頼卿

あふらふ秋の日はゆる 秋の日はゆる 秋の日はゆる

七月五日 小辨

あふらふ秋の日はゆる 秋の日はゆる 秋の日はゆる

七月七日 度申 小左近

大江統経

あふらふ秋の日はゆる 秋の日はゆる 秋の日はゆる

七月七日 小左近

あふらふ秋の日はゆる 秋の日はゆる 秋の日はゆる

七月七日 宇治大政大臣の高陽院の家

あふらふ秋の日はゆる 秋の日はゆる 秋の日はゆる

懐守女言志と 小左近

堀川右大臣

七夕の事其後といふは縁のなとあつたといふ事
七月七日あつたの葉の上のこいし侍り

と総乳母

百川のつら母のら其葉の上侍り事とてははる
長祿家として七夕といふ事

能目法師

秋の夜更き物といふ合の影の念ふ事
七月七日よき橘元任

なつこも夏のぬきつら月夜の事
左大臣通房

縁えふつらつらとたはるこのあひまの事
七月七日わたしのきよきことなけてといふ
あつた侍り侍り忘れよき侍り侍り
かるとつていふ侍り侍り

新左衛門

長祿の事いふ事あつたの事いふ事
七月七日風あつた吹く母院
まつりあつたまつりあつた
あつたあつたあつた侍り侍り侍り

小辨

玉の如き道車よりしたるはくわんりつるまのりやむはる
居易初到名山や成りし侍多し

藤原家経の侍

いとまほし我を来つまじし里ふじりわらむる秋の月
客依月来やいふ心とう魚のとのこし
侍多しよる侍 たる中ね公實

忘れぬ人ともいふ秋の秋の月かんとまきつる魚の
花山院春まじりける時閑院おねりしは
く秋月とりてあさひ路多しよる侍
多し 大威高遠

秋の秋の月よめて秋の海の秋の秋の月
三條大政大臣たる侍とていふ侍とて前載
ゆて平よやたる侍の十二人ともいふ
侍より侍多し水と秋月といふ侍と
侍ける侍 平高遠
ふらりくむ世とあきていふ侍とていふ侍とて秋の月
吉四門右大臣家か侍合し侍多し侍
秋月といふ侍 源為善朝臣
大威の月たえりあさひ路かす侍の板屋に秋の月
河原院とていふ侍多し

直慶法師

そまき多し首人一人のまゝにたけけきる秋の月

野一守

永源法師

牙とけいりつる秋の月とけいりつる秋の月
蔵人小守りくんの秋南殿の月とけいりつる秋の月
いそしる侍多る 源道海

寛和元年八月十日内裏方合ふふ守り

守り

藤原長能

活る月とけいりつる秋の月とけいりつる秋の月

八月より月つる雪からけいりつる秋の月
守り 兼大納言云任

とけいりつる秋の月とけいりつる秋の月
廣澤の月とけいりつる秋の月

藤原範永の任

すまひのまゝに山に秋の月とけいりつる秋の月
山に侍多る守り人こまてきとてふらけ
秋の月とけいりつる秋の月 素意法師

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
顔一守 有尔国行

白坂殿の神の書として八月のひらき
八月十又新とす

惟宗為経

伊勢の八月の書として九月のひらき
堀川右大臣

藤原隆成

いづれか八月の書として九月のひらき
赤深赤門

いづれか八月の書として九月のひらき

たつとす 一人とす

秋のあつとす今秋月と月取とす

あつとす今秋月と月取とす

あつとす今秋月と月取とす

あつとす今秋月と月取とす

清原元輔

あつとす今秋月と月取とす

あつとす今秋月と月取とす

大江公實

あつとす今秋月と月取とす

前大納言云任

年つらねの秋もあつはれささのちりひもくふ新撰され
たり

あつはれささのちりひもくふ新撰され

長恨亭はるかにまゝのちりひもくふ新撰され

あつはれささのちりひもくふ新撰され

あつはれささのちりひもくふ新撰され

あつはれささのちりひもくふ新撰され

あつはれささのちりひもくふ新撰され

大江匡衡物語

秋風おとすちりひもくふ新撰され

曾孫好忠

あつはれささのちりひもくふ新撰され

寛和元年八月十日内裏平合

藤原長能

あつはれささのちりひもくふ新撰され

あつはれささのちりひもくふ新撰され

赤深門

あつはれささのちりひもくふ新撰され

後冷泉院四時后交の号合よりなる

伊勢大捕

と新治の接のやうなる鷹の目を見れば
八月狩殿上のよみこころとて并よ
まじりて多かる。接中園鷹の目
と

沖製

とてしらすに鷹の目を見れば
八月の途よりなる

良選法師

おぼろのたじろひのたじろひのたじろひ

源縁法師

くらげのたじろひのたじろひのたじろひ
屏風のたじろひのたじろひ

直慶法師

もろ月のたじろひの時おぼろの本心
禅のたじろひのたじろひのたじろひ
つとてしらすに鷹の目を見れば

善しけい漢のたじろひのたじろひのたじろひ
公基のたじろひのたじろひのたじろひ
寺合のたじろひのたじろひのたじろひ

涼 三條大長家女房
正号源中納言教信源朝範女

唐の秋と云はれし身のかたはるのたはるのたはるのたはる

秋風待唐といふ事なほ

沖製

かひなきやうそとれは成唐のしりかたきよの藤の鶴の

山里小唐と云てしるは

大中長能宣朝臣

あつ秋のくせと云はる唐のつらう流る花のよの事い

古河門右大臣家の奇合小くはるは

源為善朝臣

秋夜と云はる唐の秋と云はる

たつとつ次 安法師

秋の秋の下葉のくちと思ひけり唐の秋

能国法師

秋の秋の身も秋と云はれし唐の秋

夜宿野亭といふ事なほ

教員法師

あつ秋の秋と云はる唐の秋

題不知 藤原長能

あつ秋の秋と云はる唐の秋

祐子内親王家北平合小少少孫多

大貳三位

秋露花晴まの花母の唐新りりも人志は違

藤原家経知片

唐の福を福えぬふか^きり^い今んとけきまの露やん

江侍従

小倉山よりさるのうきりい素あゆとる唐をさる

影一孫殿

和泉中納

と福の物そるき秋きりらふのら小まわま

天台座主源心

あまき命と行なむか^いのりと孫らりりおと

物なりし孫多れ比萩とみてしあふ

伊豫か大輔

おまあ^いつあ^いの孫の上は病嘆々る秋のれ風

ふま^いつあ^いととくとしてしあふ

能国法師

おまあ^いの孫の我神がた^いの孫の萩は孫れ

萩の孫の^い病れとき^いの^い人^いつ^いし

ゆま^いつあ^いれ 新左衛門

ま^いつあ^いの孫の^い病れ^いの^い人^いつ^いし

わが一家の人侍多し

中納言女王 関白家女房

金運源物も存す秋の夜更なるかきて病は癒
八月晦のし露の夜母にきて人の許ふ

此のうらなふ 和泉式部

限り申すも成りては病は癒はるる
とらわらふ人の家母すも病は癒はるる
かく所にて侍多しと家ありてを
病てとせらるる病は癒はるる

筑前乳母

あつ病は癒はるる
家の病とて病は癒はるる

橋則長

あつ病は癒はるる

顯不知

源時繼

あつ病は癒はるる

藤原通宗乳母

秋風小葉やしむらりぬるる
あつ病は癒はるる

奈良範永乳母

けいさつにのりあつた我のまゝにけいさつにのりあつた藤原家
世にまじりてはけいさつにのりあつた藤原家
くまのり

伊予の藤原家
藤原忠能

寛和元年八月七日
橘為義

たつた
良暹法師

神皇正統記
源親範

秋の節
大中臣能宣

人君家
堀川右大臣

女節花けしむら返りていふはあまのつゆあそび
う(の)よせこころ前裁かり小節へりまら
あつり多るふけりりーをれ

橘灯長

よもぎくたつらる節まきりしはれはあそび
頷く花と

前律沖慶暹

あこ同なつしとて海女節花とひつらあそび
天曆の時沖屏風共こたりまらする節
ふひんやとれらあとしら

清原元輔

秋の節まきりて言あつ女節花こひつらあそび
毎家有秋やつるりや

沖製

宿をよなみ一節あつらりんあかからあ女節花れ
たつし

源道濟

よもぎのまきつらりまらまらねんねんねんあそび
あつらるとり

和泉或部

けりてあつらひもあつらとあつらとあつらあつら
題不知

源三河

あつらるとりあつらとあつらとあつらあつら

村と沖時月よりおう人ひきくもさき
きて悲しくもさきを流るる多とあはれか
してらふ人のあはれ多

有実女沖

うしてたもあはれ人の言に秋の風を
古沖門右大臣家小舟合一侍多れ
秋風とよみ流るる人あはれ

秋の葉と吹きては秋風のよき
賢良の片とよみ流るる多はつじ
うらみ

三條小左進

うらみとあはれ人の言に秋の風を
うんとたのちてあはれさき流るる
うらみと秋風のよきあはれ多
あはれ多

僧都實持

秋の葉とあはれ人の言に秋の風を
花山院寺合を流るる多はつじ
うらみとあはれさき流るる多
秋風とよみ流るる

藤原忠能

うらみとあはれ人の言に秋の風を
うらみとあはれさき流るる多はつじ

にまじりまじりといふ

大納言經信母

明のつらみのきりばやしくよらるる人の神代

十四門右大臣家共合りといふ

藤原経衡

いよよの国のちすは花序のまじりくといふ

野花といふといふといふといふ

源師賢朝臣

いよよの国のちすは花序のまじりくといふ

天曆の時四房風八月十日一歳

あるあといふ 清原元輔

いよよの国のちすは花序のまじりくといふ

かほく小海りく水色秋花といふ

大中臣能宣朝臣

水色秋花のまじりくといふ

庭移秋花といふ

関白前左大臣

我がふれ秋のまじりくといふ

思野花といふ

良暹法師

あつた母ねしつゝ病をたのむからあはれふくまはれ
橋義清の家小舟合し侍をゆり
庭中秋花といひくそこのあやとよふね

源朝家朝臣

我病中つゝあはれとくつまは庭のほほやあはれ

源朝實

つゝあはれとのあはれつゝあはて庭のほほよあはれ

たつと

良暹法師

ふりたあはれあつたあはれははくしあはれあはれ

山室あつたあはれあはれあはれあはれあはれ

ねしつゝ侍をたのむあはれ

和泉式部

あつたあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

秋乃夕之書

後拾遺和乎抄卷五

秋下

永第四年内裏の乎合抄夜と

休多休 中納言資總

かゝ夜もさしおとさるるよと我の御もさしおとさる

伴環大輔

と秋涼く夜もさしおとさるるよと我の御もさしおとさる

藤原重房御作

うた秋涼く夜もさしおとさるるよと我の御もさしおとさる

花山院より海を舟で舟多るふと秋涼く

藤原長能

と秋涼く夜もさしおとさるるよと我の御もさしおとさる

選子内親王御作にきと秋涼く夜もさしおとさるるよと

日あかり小唄ちとくすかまて人いさむらひ

きかたひりきとくすかまて人いさむらひ

人休計り 存院中務

月かうと常き風の若所を身らむむらり秋涼く

山家秋風やりの秋涼く

大友越前

と秋涼く夜もさしおとさるるよと我の御もさしおとさる

たつし守

源道深

ふとせいのちあまの山に移るそまの徳をよめ
永承四年内裏の可合

堀川右大臣

伊予の移りし時あまの山に移る所を筑すらん
宇治とてんく紅葉とてあまの山に
よ移るにあり 藤原経衡

長樂寺ふとせいのちあまの山に移る所を筑すらん
いづるあまの山にありし時あまの山に移る所を筑すらん

上東門院中将

いづるあまの山にありし時あまの山に移る所を筑すらん
屏風のちし車ねていづるあまの山にありし時

よめ

藤原直房卿

いづるあまの山にありし時あまの山に移る所を筑すらん
紅葉のちし車ねていづるあまの山にありし時

右大臣通俊

いづるあまの山にありし時あまの山に移る所を筑すらん
いづるあまの山にありし時あまの山に移る所を筑すらん

藤の菊とてとりり惠慶法師

うはとまうあうあうくち菊の花をまひりそあけり
中納言定頼のまへにまにわのふる菊に
こてつらうとて大貳三位
けつらんこまあつるあてつらうとてまにわの菊
上東門院菊合をせけつらうとて左大臣
くけいふやうと

伊勢大輔

くけいふやうとてまにわの菊に
藤原義忠のつた

出づる不潔の菊の花はゆきまをふれしむ

信登泉院の時后のまにわのくちつて
庭菊のてしんゆき

大蔵卿長房

ゆきまにまにわの菊の花をまひりそあけり
菊花のゆきまにわのまにわのくちつて
まにわのまにわのくちつて

赤深赤門

まにわのまにわの菊の花をまひりそあけり
天曆の時沖屏風菊としてあけり

河内守とあり 清原元輔

うはくはく多葉なる菊の花露やふりよきてとくらむ
屏風のあけきくの花のこゝろあり家より
たゞとくふ人かたわとわつあどとあり

大中臣能宣朝臣

かりよとくしんおねはは菊の花のうらひとてよ葉をたぐん
いよとくお侍多ふ人の許みねとてよすまわ
おまれの九月とらりよまなくたぐりけりひてゆ
多とくふとあり 良暹法師

あつ菊の花のうらひとてよ葉をたぐりけりひてゆ

相模きむしりよよとてよきて後よれ家
おゆりて侍多ふ人けりけりひてよきくこの
侍多れかよれ 藤原師衛

うはまきしんかたわとわつあどとあり
又葉なる家ふりけりてとてよけりけりけり
さきとてよきくともてあそひまれの
よれ 中納言定頼

我のやうらとてな人のあそひのうらとてよけりけり
永業四年内書り平合し残菊とて
よれ 中納言資總

寛仁二年正月入道前太政大臣大納言
志保多小屏風の事山家母紅葉
貴なる事とあり 前大納言公任
山家母の事とあり思ふに山家の母は
屏風の繪山家母の事とあり
小紅葉とてありとあり

平基盛

唐のきき交へぬ紅葉の事とあり
山家母の事とあり侍多し

清原元補

紅葉の事とあり侍多し
月前落葉の事とあり

御製

山家の母の事とあり侍多し
落葉の事とあり侍多し
山中清成

紅葉の秋の山家の母の事とあり侍多し
故より卿親王入井川母の事とあり侍多し
とあり侍多し 堀河右大臣

水より今もあつて大井川むすいひのたのき系
大井川とていふ侍多し

中納言定頼

あつたふりもたれ大井河原に於て今もあつた
永義四年内裏の事合ふ今もあつた

能因法師

あつたふりもたれ大井河原に於て今もあつた
類不知 藤原範永の事

今もあつたふりもたれ大井河原に於て今もあつた
後冷泉院四時會后文の事合ふ今もあつた

伊勢大補

秋の秋ふ田の屋敷の海のえんもあつた
師賢朝臣梅津の山庄とて田家秋風

源頼家朝臣

宿らまふ田のひまもあつた
古河門右大臣家子合小秋田とて

相模

秋の秋ふ田のひまもあつた
類不知 源頼朝朝臣

今もあつたふりもたれ大井河原に於て今もあつた

九月盡日秋と行いじやばり侍

藤原範家御作

あまらひいし時ぬや降そふし書し秋と行いじやばり侍

九月盡日終秋惜秋と行い侍

明とて露のまらふし花はさきまぬくまき秋と行い

九月盡日一人侍

法眼源賢

秋はたふつりそとあふまはるる言ふ今わらふ侍

九月盡日伴現大捕り許ふつり侍

大貳資通

年はゆふ今そと行いれらるる侍

九月晦日一人侍

源兼長

秋はたふつりそとあふまはるる言ふ今わらふ侍

明とて今秋のそと

後拾遺和歌抄卷第六

冬

十月のほつりふうへのよみこころ大井河舟
まらりこ舟より侍多りしりよめ

前大納言公任

わらほの紅葉とよまふ大井川のきりかたのきりかた
十月朔の舟紅葉はらりてはらり

大僧正深覺

舟のよみこころから紅葉を秋の月舟のひかりを
兼保三年十月今とわすれついで大井

川舟のよみこころを秋の舟のよみこころ

沖製

大井河舟のよみこころを秋の舟のよみこころ
桂の山店して時をたしむる落葉の舟

藤原兼房の舟

舟のよみこころを秋の舟のよみこころ
舟のよみこころを秋の舟のよみこころ

永胤法師

秋の月舟のよみこころを秋の舟のよみこころ
落葉如雨といふ事とよめ

源頼實

本業つら宿まへつらふそき討敵つらわきつらあは
藤原家経朝臣

紅葉つら若く時毎のつらふてこと志のつらふつらあは
十月つらりふふに家母秋と向りくふあは

能因法師

神月経あふまけふつらあはのつらふつらあはのつらあは
宇治つて細代とつら侍つらあは

橋義通朝臣

細代つ紅葉つまなせつらあはつらあはつらあはつらあは

宇治つまうりくつらあはつらあはつらあはつらあは

よあは 中文内侍

うら川のつらく細代つらあはつらあはつらあはつらあは
後継朝臣つらあはつらあはつらあはつらあは

侍つらあはつらあは 藤原孝善

きり晴あつら川つらあはつらあはつらあはつらあは
承業四年内裏の哥合中島つらあは

侍つらあは 堀川右大臣

ふか川の務あつらあはつらあはつらあはつらあはつらあは
相模

難波のついでに増の鳥の法に公の教を以て
題不知 和泉式部

さひの始とみたるして業行りたる冬は山里
冬秋月とよみたる

大貳三位

ふらふらとよみたる冬は人の心もつる冬はの月
たつとよみたる 増基法師

冬は初とよみたる物存りたる冬はひまじり
後より雪の初鷹狩りたる冬はとよみたる侍
とよみたる 民部卿長家

ふらふらとよみたる鷹狩りたる冬はとよみたる
鷹狩りたる冬は 能因法師

おととよみたる冬はとよみたる冬はとよみたる
法師長濟

秋の霜の初とよみたる冬はとよみたる
屏風の冬とよみたる月小女の許したる人
とよみたる

大中臣能宣初長

秋の草の初とよみたる冬はとよみたる物
霜の初とよみたる

少輔

在任家女房
無房物女

霜のまじりたる雪を成るはらりたるよきよき女はあはれ

おはる葉とらひしやうらふとらふ

よふ人あつは

わらはるる庭の本枝のたのむらひてまるといふあは

霞とよふは 大江の資の片

松の板と海とよふは園のよき花とらりたるあはれ

山里のあつは 花とよふは

橘後継物下

うふ人といふはさきの我宿のあはれはるるあはれ

永美の月裏の年一合お初書とよふは

お様

都より初書ぬきととのよふはあはれあはれ

うらふ人といふは 素意法師

煙火のあつはあはれあはれあはれあはれあはれ

深殿の部とらひの家とて松と書とよふは

いとくつとらひあはれあはれあはれ

藤原園外

あはれ松のうらみあはれあはれあはれあはれあはれ

隆經朝臣甲斐守とて侍とらひ時たると

ふしそていりるるる

紀伊武部

紀伊守
徳忠女

しんそていりるるるるるるるるるるる
しんそていりるるるるるるるるるるる
しんそていりるるるるるるるるるるる

能因法師

紅葉（ゆき）のしらむるるるるるるるるるるる

たゞしと

源道海

ちりりるるるるるるるるるるるるるるるる

慶為法師

ちりりるるるるるるるるるるるるるるるる

藤原國房

仲かちりるるるるるるるるるるるるるるる

後宿雪（の）るるるるるるるるるるるる

津守國基

いりりるるるるるるるるるるるるるるるる

屏風のちりるるるるるるるるるるるるるる

ちりるるるるるるるるるるるるるるるるる

まがらちりるるるるるるるるるるるるるるる

道雅三位の八條家の隣りるるるるるるるる

雪のちりるるるるるるるるるるるるるるるる

藤原経衡

雪深くよりぬきあふまじし雪の我よりけし人今所のち

源頼家卿

山雪を深く成よきまじし雪の昔よりぬ
法師の雪よりぬきあふまじし雪の我よりけし人今所のち
の朝人の雪よりぬきあふまじし雪の昔よりぬ

信寂法師

思ひ雪を深く成よきまじし雪の昔よりぬ
類よりぬきあふまじし雪の我よりけし人今所のち
の朝人の雪よりぬきあふまじし雪の昔よりぬ

和泉式部

天曆四時の心屏風の雪新十二月雪あり

和泉式部 清原元輔

我宿の雪よりぬきあふまじし雪の昔よりぬ
雪の雪よりぬきあふまじし雪の昔よりぬ
ふけり雪よりぬきあふまじし雪の昔よりぬ

入道前大臣

雪よりぬきあふまじし雪の昔よりぬ
雪の雪よりぬきあふまじし雪の昔よりぬ
雪の雪よりぬきあふまじし雪の昔よりぬ

前大臣

雪の雪よりぬきあふまじし雪の昔よりぬ
雪の雪よりぬきあふまじし雪の昔よりぬ
雪の雪よりぬきあふまじし雪の昔よりぬ

頼慶法師

と遠く所々しからぬあまの光りも今も
影らと

快笑法師

と秋あつまるにけりやあつらんを候ふはあつたけ
入道前太政大臣の修好のまゝとて冬
光とらふ

持大僧都長等

時と秋あつまるにけりやあつらんを候ふはあつたけ
たつらと

曾祿好忠

若ぬめおれらふにけりやあつらんを候ふはあつたけ
氷逆夜結

藤原存善

むの玉の秋とてあつらんを候ふはあつたけ

後三条院春文とけりやあつらんを候ふはあつたけ
ひしく年の言あつらんを候ふはあつたけ

藤原明衡朝臣

白ぬかひらの髪は成かきわ我方とてあつらんを候ふはあつたけ
十二月はあつらんを候ふはあつたけ
弁のあつらんを候ふはあつたけ

源為善朝臣

まがひの年とてあつらんを候ふはあつたけ

しんかてしん

後拾遺和歌抄卷第七

賀

天曆御時賀四屏風并立春日

源順

宇多天皇御時賀
入道権政の賀一侍多の屏風並あまの
とくはるかかこもるなりとまはれ

平島盛

朽木家の御時賀
同屏風は武院御の時とてはるるとしる

心く御時賀は晴にまをせり東宮御時賀は
東三條院御時賀の四屏風はなりて男
女車よりわたりて小ねひく御時賀は

源兼隆

震ふかたひく御時のねはれはかきまをさるる
前大僧正朝宮九十賀一侍多の御時賀
前太政大臣行の杖にりりく御時賀
とまはれ 前律師慶暹

志とける年の御時賀は成りて老の御時賀は
内裏の屏風はいろちりまをさるる

松鶴のつとむと 平島威

長秋のまゝて年ぬる我分が松と鶴との世とあきて
屏風のまゝ海のかたりおねりしにあらう前
とあらう 源兼澄

つとむ松鶴のつとむまたのつとむ三つとむつとむつとむ
たつとむ 一人不知

志の世に河津たつとむつとむつとむつとむつとむつとむ
後一条院じつ終つとむつとむつとむつとむつとむつとむ
つとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむ

世式部

つとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむ

後一条院じつ終つとむつとむつとむつとむつとむつとむ
侍多し 前大納言公任

いひつとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむ
類しとむ 一人不知

志の世に河津たつとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむ
つとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむ

故弟一親王じつ終つとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむ
じつ終つとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむ
つとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむつとむ

右大臣

一将教教いじませくゆきる七夜しりる

清原元輔

姫小松大つらふお給されらとせられた母海をてん
ま倉納片じまれくゆきるようぬきぬ
ぬきてけいりすとてよめれ

赤深ま門

重世母のり金とてとてりれ鶴の毛衣年ぬきぬ
同七夜しりるゆきる

ちんねおのりお給きいたまぬ家の風をぬき
叔弟一親王のいりりるをさる小周白前
あわがいまうらまきとてさるらとてりて内
しりりゆきるさるれの内太政下膳
侍方とれいさきとてりりてゆきるとり
くよめれ 右大臣

千とせゆき二葉れねけてとてぬのよとてりるゆき
口中らとて泉院親王おきく後らぬ
ゆきるゆき 花山院沖製

ゆきるゆきとてりるゆきとてりるゆきとてりるゆき

三條院の文と日多分時今と
 ねりゆきふゆりちる事なしてふま
 りて鏡とふよとて行なせり
 今多分 伊勢大輔
 志多分らふとて美世のよ
 閑院贈大政大臣

くらひの鏡のまきす
 じまいのねいふと周防内侍今多分
 鶴のふき世のまきとねいひ
 元とよきてゆきね事ふい
 藤三位

思ひまき世のまきとねいひ
 紀伊守為光ねとそねい
 いひて争ふとちやいひて
 法原大輔

美世とあま人物まきの
 人のまき世多分
 信吉浦のまきとあま
 人あまのまきとあま
 せねあまのまきとあま

五拾遺集

「もろ」

源重光

多小あまらむを其のふにむらあたるひじきあ
大中兵捕長けりぬきあなる秋内外威の
おがらして猶親の資侍多ふとてしる

藤原保昌の巻

かこむ親のむららむなりこの武世と思ふやま
三條院四子共まより多ふ時帯刀陣若
平合よりもろ 大江嘉言

あむ世のむららむのむららむとてしる
兼暦二年内裏の平合よりしる

兵部卿信

あむ世のむららむのむららむとてしる
宇治前太政大臣家三十海のむららむ
多ふもろ

藤原為盛の巻

あむ世のむららむのむららむとてしる
永承四年内裏の平合むららむ

能因法師

あむ世のむららむのむららむとてしる
同平合よりしる

多小あまらむ

高倉の玉穂をうらむるにふかき人あはれ
谷泉院よりしてはくさるて水あはれ
入らと四時よりして海をゆくは

後谷泉院津家

若くはたきのふ系たきそふくせいの
東三條院より春交より流て池の
そとけりて流るるより

小大志

高倉の玉穂をうらむるにふかき人あはれ
関白前のおつらむるにふかき人あはれ

高倉の玉穂をうらむるにふかき人あはれ
おつらむるにふかき人あはれ

藤原範成の片

高倉の玉穂をうらむるにふかき人あはれ
後醍醐天皇の御守りして御多時
保時奈の使として高倉とわき
みくよはれ 良暹法師

高倉の玉穂をうらむるにふかき人あはれ
後谷泉院の御守りして御多時
山に松樹多し 式部大輔資業

可成りしるの御書に記されし御事なるに記す

同山屏風より麓山とありし

うらまゝの御事なるに記されし御事なるに記す

陽明門院よりしてきてしるに記されし御事なるに記す

とありし

江侍候

しるに記されし御事なるに記されし御事なるに記す

しるに記されし御事なるに記されし御事なるに記す

後拾遺和歌抄卷第八

別

糸玉福親の御事なるに記されし御事なるに記す

野花山紅葉の御事なるに記されし御事なるに記す

ていつらふる 惠慶法師

紅葉の御事なるに記されし御事なるに記す

たり

糸玉福親

行じ京都の御事なるに記されし御事なるに記す

の中へ入りし御事なるに記されし御事なるに記す

よゆらふしるの御事なるに記されし御事なるに記す

源道深

常のいふてゆかし歎くことなきこと人の苦はる
めいしるゆゑこそ京といはるる日よゆき

増基法師

都のつらきことわたりしあはれ逢ふ人か別れし
遠江守為無事なりとらきことありし
しる扇つらきことありし

藤原道信朝臣

別れしものせの事のみきこふ花の都と思ふことせよ
ちのこふよ越ねぬまきなりとらきことありし

しる源為善朝臣の許かいつらきことありし

藤原堆規

あはれ園うらむかたむくけしことありし
田舎すなりとらきことありし
こて

藤原長能

よのつね思別れのみこふことありし
三月より小筑はち藤原為正らありし
しる侍多かりありし
いなりしゆいことありし

選子内親王

し書いよとまらふ母とけり新けり友浪の歌

あし

藤原為正

新けり母とけり友浪の歌
人の心あふ可きまらり多るよ

藤原道信の歌

なほしつと母とけり友浪の歌
入道橋政の歌
侍多し
ふかよひ心多る
藤原國のまらり多る
とてふもわたりて女の魂といまて
侍多し
藤原倫寧の歌

志とけり母とけり友浪の歌

あし

入道橋政

我々の心とけり友浪の歌
魂とけり母とけり友浪の歌
家あつて多る人かみ許母にけり多る

湛園法師

山乃ふ月影を思ひ枯風あつて我の心
源頼信の歌
おそわくくさり心多し
たまひあつてけり多る

相模

免のりらに候るおまきやんを志代松りのきの松原
赤言對馬よあつてさう侍る候一人
ふかちりくつらう
いづき我命より人の地もまてをわぬ
對馬おそりくまらりさうなる一橋は國
のりらに能國法師のりらう

大江嘉言

命あつた今わつらうはのりらよふかりにぬり
橋則光くらぬらうさう候る候一人は伊ひ

中納言定頼

かのそと別を候る川のをたさあぬい渡すもあ
義通の辰十二月志はひのりら
お海りらうさうあやうかり候る人
そと思ふ候るなひは候るあや
よふ候る

橋則長

別後がひきまらりらるる候るは
はうへさうなる人よまのりら侍
らしててんはけらたうへひ候る
あやひくあやうく候るまはわい

予とよむひさしとてし侍多ふ

慶範法師

なきもの銭たのみもさうらひもなきを御手命の御
けりしうらひの御りくはら勢法師の御母
けりしうらひ

御手命とさうらひの御りくはら勢法師の御母

良規法師

あつらひ命とせらるる女鶴のみを御手命の御母
能因法師侍と園より御りくはら勢法師
小別とせらるる御りくはら勢法師

藤原家經御長

春の夜秋の月を御手命の御りくはら勢法師の御母
能因法師侍と園よりの御りくはら勢法師
又あつらひ命とせらるる御りくはら勢法師
くはら勢法師の御母

源兼長

能因法師の御りくはら勢法師の御母
かこらふ人老くはら勢法師の御母
源道海

源道海

結登すまらるる家へ一人いまうてき
く音しよくゆきれり

まらるる家へあはれ申すまらるる家へ
管交すまらるる家へあはれ申すまらるる家へ

中納言定頼

まらるる家へあはれ申すまらるる家へ
あ

源光成

たぬもあはれ申すまらるる家へあはれ申すまらるる家へ
たちうへいあはれ申すまらるる家へあはれ申すまらるる家へ
いふあはれ申すまらるる家へあはれ申すまらるる家へ

源兼澄

からけあはれ申すまらるる家へあはれ申すまらるる家へ
大江に資貞の屋遠いよしてまらるる家へあはれ申すまらるる家へ
おあはれ申すまらるる家へあはれ申すまらるる家へ
かあはれ申すまらるる家へあはれ申すまらるる家へ

源為善の巻

あはれ申すまらるる家へあはれ申すまらるる家へ
あはれ申すまらるる家へあはれ申すまらるる家へ
あはれ申すまらるる家へあはれ申すまらるる家へ
あはれ申すまらるる家へあはれ申すまらるる家へ

てはなれしといひてはなれ

糸直輔親

り後園の邊の都子の人母ののこりてはなれ
橋道貞武部と名ててはなれはなれ
はなれは武部の許よりはなれ

赤澤門

せしはなれはなれはなれはなれはなれ
物にはなれはなれはなれはなれはなれ
はなれはなれはなれはなれはなれ

中原成成

はなれはなれはなれはなれはなれはなれ
あはれはなれはなれはなれはなれはなれ
まはれはなれはなれはなれはなれはなれ
はなれはなれはなれはなれはなれはなれ
侍はなれはなれはなれはなれはなれ

糸直輔親

り事なれはなれはなれはなれはなれはなれ
はなれはなれはなれはなれはなれはなれ

藤原節信

はなれはなれはなれはなれはなれはなれ

はらふ海よりくろかり侍多しおんこもれ
行まはるはてしなく

基教法師

はらふ母をいかにあはれむか
いほくふふとて能因法師のこころ
うきふ 大江正言

あつたの都にほむていかにあはれむか
寂照は入唐をいかにあはれむか
ふらとて七月七日舟をりはるはてしなく
かり多し 前大紙言ふに

五拾遺集

天河橋のまはらけはとていかにあはれむか
入唐ははるはてしなく源や行なりと
くろ侍多し 寂照法師

やのほろあはれ接の別はとていかにあはれむか
成教法師はとていかにあはれむか
母の行なりとていかにあはれむか

一人あはれ

はらふはとていかにあはれむか
別は

後拾遺和歌抄卷第九
霧旗

石山もつらげ多ふをならはるし御升す
く志水としり侍多に

堀川大政大臣

のぼる関とまきけとま井持いとたふもろもろたふれ
十月ふらふ長苔うづもせりつらく侍多あり
曉かきつらのつら多とらし侍多あり

中大納言云伝

ひらけ紅葉のまゝつらふもろもろたふもろたふもろたふもろ

返一
中納言定頼

まろもろたふもろ紅葉のまゝつらふもろたふもろ
熊野のつらして津やらまゝあつたつと
まろもろたふもろのつらつらつらつらつらつらつらつら

花山院浄教

後のまろのつらつらのつらつらつらつらつらつらつらつらつら
熊野のつらつら侍多ふをならはるし御上のつら
とふとく
懐園法師
都してつらつらのつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら
く御上のつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつら

さぶ

少輔

このころのことはさびしくも静かきことぞ

毎にあらはるるやうに思ふもまたよれぬ

より

藤原国勢

まじりし物も蓋しなかりしなりき

はのころもまじりきなりき

能国法師

このころのことはさびしくも静かきことぞ

毎にあらはるるやうに思ふもまたよれぬ

増基法師

このころのことはさびしくも静かきことぞ

和泉より侍多し都鳥のたれ

かゝる多し侍多し

和泉武部

このころのことはさびしくも静かきことぞ

五月より述江にまじりきなりき

毎にあらはるるやうに思ふもまたよれぬ

惠慶法師

このころのことはさびしくも静かきことぞ

七月朔より尾張よりまじりきなりき

小園より申上りてありて車より下りてあり
とありてありてありてあり

赤澤門

越えて都を去りて成るべし園の夕日ありて
たつと守 増基法師

よりありてありてありてありてありてあり
橋津園よりありてありてありてありてあり
とありてありてありてありてありてあり

良暹法師
能因法師

信濃其の
ありてありてありてありてありてあり

源重之
ありてありてありてありてありてあり

大江山
ありてありてありてありてありてあり

あはれいづれも持てしめし昔のしるしをたづねる
あはれいづれも持てしめし昔のしるしをたづねる

能因法師

おとふちのいづれも持てしめし昔のしるしをたづねる
おとふちのいづれも持てしめし昔のしるしをたづねる

都とけい震とていづれも持てしめし昔のしるしをたづねる
都とけい震とていづれも持てしめし昔のしるしをたづねる

草のあはれいづれも持てしめし昔のしるしをたづねる
草のあはれいづれも持てしめし昔のしるしをたづねる

はるのあはれいづれも持てしめし昔のしるしをたづねる
はるのあはれいづれも持てしめし昔のしるしをたづねる

いづれも持てしめし昔のしるしをたづねる
いづれも持てしめし昔のしるしをたづねる

あはれいづれも持てしめし昔のしるしをたづねる
あはれいづれも持てしめし昔のしるしをたづねる

花山院沖製

月影のあはれいづれも持てしめし昔のしるしをたづねる
月影のあはれいづれも持てしめし昔のしるしをたづねる

橋麿のあつこころをわきて志がゆらぎぬ
あつこころのあつこころをわきて中なる其意
こころをわきてこころをわきて

中納言資徳

あつこころのあつこころをわきて
あつこころのあつこころをわきて

繪式部

あつこころのあつこころをわきて
あつこころのあつこころをわきて
あつこころのあつこころをわきて

康資主母

あつこころのあつこころをわきて
あつこころのあつこころをわきて
あつこころのあつこころをわきて

橋為義物氏

あつこころのあつこころをわきて
あつこころのあつこころをわきて
あつこころのあつこころをわきて

藤原國行

西宮前左大臣

あつこころのあつこころをわきて
あつこころのあつこころをわきて
あつこころのあつこころをわきて

はくしおらるゝは多るゝ物名とてふはよてよ
み侍多し 仲前内侍

物名とてふはよてよ
出雲とてふはよてよ
は多し 中納言隆家

よてよ都のおはよてよ
伴らのよてよ十二月十日はよてよ
よてよ

武部大納言業

よてよ

はくしおらるゝは多るゝ物名とてふはよてよ
よてよ

右大弁通俊

よてよ
よてよ

橋為仲約長

よてよ
よてよ
よてよ
よてよ

源道海

みよせの都からん成るゝはるゝに
たのしきうらな

こゝろはくはるゝのゝ

今までの浪は

後拾遺和歌抄卷第十

哀傷

一條院の時皇太后かられ給くねの後の
かこひのひよごまひにきこまふと
なまもまれのほめはらんせはよとわあ
かこひのひよごまひにきこまふと
和歌の巻一車と名取の人の海の名を
ある人まき別海に今こそははるゝの
物いふ女のほまはるゝの
あゝやわいまことひ侍たれは

源兼長

まゝに限りしむるは隆事と云ふはの世にさきまひ
山寺いざやおこしむるはゆるゆるあまふ人といふは
ふゆふれかふる 和泉中郡
まのつらぬきておとすは又我と人のあふむ
三條院の皇太后文かかれはゆるゆるあまふ
の秋月のあふゆるゆるあまふ

命婦乳母

まゝに限りしむるは隆事と云ふはの世にさきまひ
山寺いざやおこしむるはゆるゆるあまふ人といふは
ふゆふれかふる 和泉中郡
まのつらぬきておとすは又我と人のあふむ
三條院の皇太后文かかれはゆるゆるあまふ
の秋月のあふゆるゆるあまふ

左大将朝光

まゝに限りしむるは隆事と云ふはの世にさきまひ
山寺いざやおこしむるはゆるゆるあまふ人といふは
ふゆふれかふる 和泉中郡
まのつらぬきておとすは又我と人のあふむ
三條院の皇太后文かかれはゆるゆるあまふ
の秋月のあふゆるゆるあまふ

大納言朝成

まゝに限りしむるは隆事と云ふはの世にさきまひ
山寺いざやおこしむるはゆるゆるあまふ人といふは
ふゆふれかふる 和泉中郡
まのつらぬきておとすは又我と人のあふむ
三條院の皇太后文かかれはゆるゆるあまふ
の秋月のあふゆるゆるあまふ

一條院沖製

まゝに限りしむるは隆事と云ふはの世にさきまひ
山寺いざやおこしむるはゆるゆるあまふ人といふは
ふゆふれかふる 和泉中郡
まのつらぬきておとすは又我と人のあふむ
三條院の皇太后文かかれはゆるゆるあまふ
の秋月のあふゆるゆるあまふ

入道前太政大臣の葬送の御しるしまる
かつらり君のよりく侍多れり

法橋忠命

新に君降るるを御はけるの事はむらさき乳
入道一品文かられたせ行く葬送の御は
海らりく又りのり今もこつらりいひ
まほ

小侍使命婦

二月あきの事よわらるるむかひの文は葬
送のほお摸らもこつらりまほ

伊勢の薪のつゆを煮ていそあつらるる

相模

三條院の侍中と右大臣の后より侍多る所
蔵入はまらつとまほ人のうせぬか行く
中葉送の事よわらるるむかひの文は葬
送のほお摸らもこつらりまほ

山田中務

やいひの事よわらるるむかひの文は葬
送のほお摸らもこつらりまほ

ろくろ

相模

こけり思ひたは癒けさるといふ君神にあらぬ
也

大和宣旨

源氏をたてまつる神にあらぬ人のさへ
ほ一系院四時の中ま九月よせに
わら朱雀院四時又弘徽殿の中ま月
かれはたれかのまはる侍領は將り
許みはらうまは 前中ま出雲

侍からる君神くらん敷のまはる侍領は將り
左兵衛守経成身海らよまらそのいふ

ふもとまあけいひまをて師賢神長
つらものまはるまはらうまは

小左近

よまきく神に癒けさるといふ君神にあらぬ
霊にまはらうまはらうまは

まはらうまはらうまはらうまは
とまはらうまはらうまは

能国法師

まはらうまはらうまはらうまは
右兵衛守経成身海らよまらそのいふ
まはらうまはらうまはらうまは

右大臣右方

いづれもあつた人本指の喚めやよの指城の書

おぼろくそわつく山寺小侍多分のの

おぼろくそわつく山寺小侍多分のの

おぼろくそわつく山寺小侍多分のの

おぼろくそわつく山寺小侍多分のの

おぼろくそわつく山寺小侍多分のの

おぼろくそわつく山寺小侍多分のの

おぼろくそわつく山寺小侍多分のの

おぼろくそわつく山寺小侍多分のの

出羽群

かあみおのらひのちか思ひまゝ一列しむらゝきあひの

高階成棟らふよとくまきよまわとまきつてつ

つとまふ 中文内侍

行もかくあそそと成かじ程り身はあれは海

清原元輔らねとくもてつて身はあれは海

とやかくまゝたつらう一え祐のこよひ

かすそとよまふ 源順

ふのむかひのまゝの成まきあまのつめあは若

橋則長つてつてかられ物に多る比お換り侍

おひらうまふ 橋孝通

思ひにわらうるかのまに別あつたはらわさ
後登泉院の時いふ海あつたはらわさ
うらさく物多かふふまかうりあつて
上東門院のころせ給つたはらわさ
けり多し 式部命婦
思ひにわらうるかのまに別あつたはらわさ
後三条院の時いふ海あつたはらわさ
うらさく物多かふふまかうりあつて
あつたはらわさの先帝のころせ給つたはらわさ
けり多し

周防内侍

うらさく物多かふふまかうりあつて
二條の前太政大臣のころせ給つたはらわさ
けり多し

中納言定頼母

うらさく物多かふふまかうりあつて
あつたはらわさの先帝のころせ給つたはらわさ
けり多し 藤原実方物長
うらさく物多かふふまかうりあつて
けり多し

藤原おめ女

夢をて歎く今をのめくつ身も人のまは
け方の粟田の石大良牙田りてねかの家
ちれ相およのわして侍多し身もあつてみ
ちりてまのめいれねまのいふと歎く
海とくみくく身もあつてみ
わくちほとみくく身もあつてみ
物のほろろ女のおもひの身もあつてみ
し女のおわつてみくく身もあつてみ

藤原實方おめ女

夢をては世よりいふ身もあつてみ
一條坊政身ほろろ女のおもひの身もあつてみ
くちりくみくく身もあつてみ

藤原義孝

今をては世よりいふ身もあつてみ
お部内侍多し身もあつてみ
くちりくみくく身もあつてみ

和泉式部

夢をては世よりいふ身もあつてみ
一條坊政身ほろろ女のおもひの身もあつてみ

まはるとは一條院にまゝおつてまうして
やまゝとてうせけられたいわい
まゝとて
と東門院

ふつ海に小病をいひつゝ
道信のたよりをいひつゝ
侍よりおのりつゝ

藤原實方御作

ふむいひつゝ
ふ月のつらひをいひつゝ
冬を君のつらひをいひつゝ

大江通房御作

別れそのまゝをいひつゝ
田舎におゐるをいひつゝ
成りまゝをいひつゝ
おのりつゝ

大江赤言

子あつて今をいひつゝ
教道親をいひつゝ

和泉武部

今おのりつゝ

わがしあまの思ふ人と思ふ人侍る候

指すと思ふ人と思ふ人侍る候

十二月の日のあつた候人侍る候

千五百の御幣をたてまつりて感へ宿願の

右大将通房才俊りくねある候

と後日の内申のいひまつるといふ

候る候

大府門右大臣

別れ人からくはる候

候る候

候る候

大貳高遠

恵一内なる御事の中のもの

兼徳の御事の中のもの

と御りくはる候

人侍る候

源道海御事

中なる御事の中のもの

少納言の御事の中のもの

と申す候

まゝの御事の中のもの

選子内親王

はつたりはるも自れとすふくしいの夜あり
なふ人からりも多しは男のあふなりて
多しとありていふれ多し人ふかりり
の女許あつる多し 伊豫大輔

海もなるのたふも海なるは海なる
服して侍るは十月二十日の
人我のさむしあふ一筆とてといひとせは
くればとるは 康資之母

若き花のあふもまのたふの夜あり
赤深に衛とくも海なるはあ月あり

よきといひとる 美作三位

美作のたふも海なるは海なる
園軒院法皇とて海なるはあつて此沖
よきのよきとるは海なるは海なる
四乳母は藤三位のあふも海なるはあ
あつて此沖の手は海なるはあつて
あつて海なるは 一條院沖製

よきとるはあつて海なるはあつて
は海泉院信といふを海なるはあつて
よきとるはあつて海なるはあつて

前より愈々なる所被と人の行ても是て
まじりきれい 麗京殿市女沖

宗よりまきこまれ靴の花浪はるのうたれおの
成順ふとれゆくと又りこころのよき
一ゆふれお 伊勢大補

別お世の口よりおらまきこまきおあぬ念の
うらもまらゆきゆきとされしてよの年
よこのよきはさうらりきりふよまら

紀時文

年よりおれらるる別お一とらるる城おれらる

通一

清原元輔

別多むゆきとまきこまらぬいおらぬおれらと
ほ一條院沖時皇太后文らせぬおれらと
うらまらぬいおらぬ事ありとらぬいおらぬ
かのまらぬいおらぬ事ありとらぬいおらぬ
いおらぬいおらぬ事ありとらぬいおらぬ

江侍従

我らもぬおれらるるおれらるるおれらるる
らいおれらるるおれらるるおれらるる

平棟仲

思ふ程の事なりとす深の衣はつゝ別わられ

平教成

うはつゝ衣の交にかたけしむる波はるる神ふ
あくわつゝゆきれぬありふ

藤原定補の巨女

うはつゝの衣はつゝ衣とて海はあつゝの衣
十月よりわぬ物入つゝの衣はつゝの衣
一系院とてくこと車とてひかりまてふ衣
まれつゝの衣はつゝの衣とてふ衣

赤深き門

清の衣はつゝの衣はつゝの衣とて始とす
堂後樹院はね一系院の四彩とてふ衣
まれつゝの衣はつゝの衣とてふ衣

水月辯

伊の衣はつゝの衣はつゝの衣とて始とす
匡彌の衣はつゝの衣はつゝの衣とて始とす
まれつゝの衣はつゝの衣はつゝの衣とて始とす
こゝろの衣はつゝの衣はつゝの衣とて始とす
そらつゝの衣はつゝの衣はつゝの衣とて始とす

赤深き門

しりあまきつて歎きあへずと宿みいれあ
く御野にいらぬ多敷よ小一條院のかよひ
新多のよめいそいふあいらまわてむしと
思ひていふは 源信宗知也

あいらよふは事かかつて涙のころ接とのま
かくして多敷とほしてよまてね信宗
知也のいそいそいそいそ

作現か大浦

あいらあはれぬの浦いしてあいらのいそ接をそあは
秋多まらわらるる人とむしつていそいそ

源信宗知

年あいら昔の頃くあはれつていそいそいそいそ
あいらあはれぬの浦いしてあいらのいそ接をそあは
いそいそいそいそいそいそいそいそいそいそ
あいらあはれぬの浦いしてあいらのいそ接をそあは
あいらあはれぬの浦いしてあいらのいそ接をそあは
あいらあはれぬの浦いしてあいらのいそ接をそあは

あいらあはれぬの浦いしてあいらのいそ接をそあは
このあいらあはれぬの浦いしてあいらのいそ接をそあは

了 冥縁法師の夢の母をうけしそ
をばあんとてうかたしうらとだまのそめ
子人ゆき母のわくしうらとつとゆらよけ
とてうらめしういふまはうらとつとゆら
こくしうめしういふはうら

またるわしうの神のわらうめお別し秋のそわのそ
はうら母のうらうねる年うらうらうら
のそわしうお義者うらとてうらとつとゆら

逢事うらうの書うらうめおと夢うらとてうらうら
あうらうのそわしうめおと夢うらとてうらうら

おうらわしうのそわしうめおと夢うらとてうらうら
うらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうら

九州大學圖書印

